

# 私の保育ノートから

## おもちゃの取り合いから考えたこと — 過去の記録から学び直す —

川島明希子

私は、大学を卒業後、乳児保育所（0～2歳児対象）を二園経験し、保育士として七年目の現在、公立の1～6歳児対象の保育所に勤務しております。

今振り返ると、乳児保育所は、小さい子どもが集うところらしい、穏やかな雰囲気にはなっていました。その雰囲気は温かみに包まれながらも、新米保育士であった私は、この子は今、何を求めているのだろう、自分なりにこんなかわりをしてみたけど、よかったかな？と心も身体も目いっぱい使って試行錯誤していた日々でした。

もちろん今でも試行錯誤の毎日であることは変わらないですが、保育士なりたてで悩んでいた経験は

特別なもので、決して忘れることができません。

特に、保育者としての対応を考えさせられたのが、子ども同士のいざこざ、中でもおもちゃの取り合いでした。どちらが、正しい、間違っているではなく、それぞれの気持ちをもとに支えていくことができるのか、今でもふと考えることがあります。今回は今までの乳児保育所時代の記録を取り上げ、その当時の子どもの気持ちにもう一度思いを寄せ、私なりに保育を再考してみたいと思います。

### 記録1

おやつの後、「シンデレラ、するの。カモン！」とA子

(二歳三か月)に誘われ、広いスペースでシンデレラになりきって一緒に踊る。そこへミニー(ぬいぐるみ)を抱いたB子(二歳四か月)がやって来て、「B子もー」と私と手をつないで踊る。三人に一体感があり、心地よい。楽しく踊っていると、C男(二歳二か月)が場に入り、A子の背中にくっついたり、A子のまねをしてぐるぐると回ったりしていた。そして、B子が「わたしの名前はB子ちゃん!」と言うたびに、C男は「B子ちゃんC男くん!」とB子の名前にC男の名前をくっつけて言ってみては楽しそうな表情を浮かべている。

C男も入り、広がった世界に充実した気分でしたが、あの瞬間からC男が無言でB子のミニーを奪おうとしている。だが、B子のほうが断然力が強く、奪えない。どうしたのだろうか?と様子を見ながら踊り続けていると、何度も何度もミニーを奪おうとしている。取られないもの、かなり長い時間取られそうになってB子が相当いらいらしてきたので、仲介に入る。「貸してって言ってみたら?」「B子ちゃん、帰る時間になったら貸してくれる

から、待ってくれる?」など声かけてみるが、C男は今すぐB子からミニーを取る。以外は全く受けつけず、力で奪おうとする。埒があかないと思い、「C男くん、待てないらしい。走って逃げよう!」と、手をつないで広いスペースをぐるぐる回る。やっとB子に笑顔が戻る。心配そうに見ていたA子も、「あそんでるね!」と笑顔になり、後からぐるぐる追いかけるように回る。C男はあきらめ切れず、B子の後を追いかける。その顔が苦しい、悲しいというよりは、何かに挑戦している。ような顔つきであることが印象的だ。相当長い時間走ると、C男は何かに潰されるように、床にうつ伏せで寝転がる。その後も何度もミニーを奪おうとするが、なかなか奪えない。しばらくして、B子がトイレに行っている間、床に転がっていたミニーをC男が拾ったようで、ミニーを持って私に「ミッキーちゃんにチューしちゃった!」と報告する。そう言くと、さっと自分の好きなブロックの方へ行く。あっさりミニーを投げ捨てて、遊び始める。

(後から知ったのだが、この事例の直前にC男はミッキー

のぬいぐるみをD子(二歳十か月)に奪われていたらしい)。

この事例では、長い間B子を追いかけてミニーを手に入れようとしたC男が、手に入れたことで満足して、他の遊びに気持ちが向いたことが印象的でした。C男にとって、ミニーで遊ぶことではなく、ミニーを手に入れることが目的だったように思えます。

D子に取られたミッキーのぬいぐるみがC男の気持ちの中で欠けていたため、ミッキーに似たミニーで気持ちを満たそうとしたのかもしれない。もしくは「私の名前はB子ちゃん」の後、「B子ちゃんC男君」と自分の名前にB子の名前を付けてみたくなるほどにB子と共鳴し合うことを求めた結果、B子の持つミニーが欲しくなったのかもしれない。どちらとも考えられ、C男の気持ちを断定することはできませんが、どことなくそう感じられます。

## 記録2

お砂場にて、ペットボトルを船に見立てて走らせるのを

終えたE男(三歳六か月)は、F子(二歳二か月)がどんぐりをお鍋に入れてままごとをしているのをじっと見ている。すると、F子のお鍋をぎゅっと取ってしまう。「E男君、ぎゅって取ったら嫌だつて」と伝えたところ、「うん」と言うものの、返そうともせず、お鍋で遊び続ける。いまいち聞いてない？

F子は、お鍋を取り返そうともせず、さらっと別のお皿で遊び続ける。そこへE男が同じようなお皿、お玉を持ってきて、近くでままごとをし始める。時折F子の様子を見ている。E男のままごとの仕方はF子そっくりで、まねしているようだ。ただ、表情が険しい。しばらくすると、「かーしーてー」と言いながら、またぎゅっと取ってしまう。F子は、お砂場から離れて、大きなタライのある所へ行く。引っくり返してあるタライを「とんとん」と叩くのを楽しみ始める。すると、E男も来て、F子のように「とんとん」と同じタライを叩き始める。お互い顔を合わせてニコニコ。とても楽しそう。

そうかと思つと「とんとん」のリズムに乗って気持ち弾んできたF子がタライを持って歩こうとすると、「夕

メー」と言って取り上げる。タライを置いて、さっきと同じようにタライを叩くのかと思いきや、F子がやるうとしていたタライを持って歩くことをやり始める。それから、E男はF子の持っているものをすべて取り上げてしまふ。ついにF子が泣きながら、私のひざに来る。E男が目の前に来て、F子に「いっしょにあそぼうよー」と誘うので、「F子は遊んでいるものを取られたことが嫌なんだよ、今はそっとしてあげてほしい……」と私から伝える。

F子の気持ちが落ち着いてきたころ、E男は一人でままたごとの世界を広げていた。普段見られないほど、とても充実していた。

お砂場からあがつて、昼食のため席に着いていると、「ごりあいっこしたねー」「楽しかったねー ねっ、みんな！」と友達に呼びかける。皆はよくわからなくて無反応なのに、E男はニコニコと満足そうだった。

E男は仲良くなりたい相手を選んで、「まねっこする↓相手のものを取る↓相手が離れるとまた近づいてまねっこをする」の繰り返しを毎日していた。相手の友達に

とっては、大人側がどんなにE男の思い(魅力的だから、取りたくなつた)を代弁したところで、何度も取られることは受け入れ難いかかわりであることに変わりはない。基本的には、ある程度子ども同士のやりとりを見てから仲介したいという思いがあるが、この場面ではどこで仲介したほうがいいのかと迷う。

記録2を読み直すと、F子の使っているおもちゃをたくさん取ってしまった後に、「取り合いっこしたね。楽しかったね」と満足そうにいざこざを振り返っていたE男に、私自身がぼうぜんとしてしまったことを思い出します。F子のことも考えると複雑な心境だった私にとって、満足そうな表情のE男を見た時、E男の気持ちが遠いもののように見え、置いていかれたような気持ちになったのです。

改めてE男の立場になってみると、F子と一緒に遊ぼうとしているわけではないようでした。それよりも、F子になって遊ぼうとしていたので

はないでしょうか。

E男は、F子のお鍋を取り上げてF子になって遊んでみるものの、F子が別の遊びをしているのを見ると、今していることがF子ではないものと感じられ、やめてみる。そして、F子がちょうど今使っているお皿やお玉を持ってきて、F子と同じように遊ぼうとします。それはE男なりに自分の内にある要求を表現するための試行錯誤の一つだったのでしよう。けれど、それはE男の要求そのものにフィットしていないからこそ、「表情は険しい」だったのかもしれない。

F子がちょうど今使っているおもちゃを取り上げ、E男がその時のF子になって遊ぶ行為は、E男にとって、友達の魅力的な遊びを通して、自分の遊びを豊かにしようとする一つの方法だったと思います。だからこそ、E男はたくさん取り上げた後、自分の力で、ままごとの世界をつくり上げたのでしょう。

私は、この事例でのいざごどの最中、E男の要求をどこことなく感じていたことと、F子がおもちゃを

取られても、さっと気持ちを切り替えて別の遊びをしていたことがあり、そのまま二人の様子を見ていることになりました。ただ、今思えば、F子はE男よりも小さい人だったから、嫌だった気持ちをすんなりと出せず気持ちを切り替えずにはいられなかったのかもしれない。本当のところはもうわかりませんが、その可能性があるのなら、F子に「嫌だと言っても大丈夫だよ」という何らかのサインを送るべきだったな、といまさらながら反省しています。

E男の「取り合いっこしたね。楽しかったね」という言葉が、私の気持ちのどこかに引っかかっていたのは、E男がF子の思いに気付いてほしいなど、どこかで考えていたからだと思います。E男も自分の要求を叶えるのに一生懸命なのでF子の思いに気付くのが難しいかなと思いつつも、もし今の私がタイムスリップできるなら、F子に確認した上で、もつとF子の思いを伝えようとするかもしれません。

C男やE男の側に立つてみると、友達のおもちゃ

を欲しがるという行為の裏にある気持ちは、ただ  
「そのおもちゃが欲しい」だけではないことが伝わっ  
てきます。友達そのものになって、魅力的な遊び  
を体感する「であつたり、自分のどことなく満た  
されていない気持ちを満たす」であつたりすること  
もあるようです。そのことを考えると、友達のおも  
ちゃを欲しがることを、簡単に「友達のだからダメ  
!」というのは乱暴な対応なのかもしれません。取  
られる側にいる友達の気持ちをくみ取りながらも、  
おもちゃを取ろうとする子の気持ちがどうしたら満  
たされたり切り替えられたりするのか、丁寧に考え  
ていく必要があると思われます。

保育者がおもちゃを欲しがる子の気持ちをくんで  
対応することは、おもちゃを取られそうになった子  
にとつては相手の思いに気付く機会になる可能性も  
あるのではないのでしょうか。自分の大事なものを取  
られるという体験は、自分の一部を取られるようで  
つらいものではあるでしょう。ですが、そのつらい

気持ちが保育者によって支えられるならば、友達の  
思いに気付くチャンスに一步近づくように思います。

また、おもちゃの取り合いというのは、保育者が  
向きを変えてみると当事者以外の子どもたちもよく  
見ているということがあります。おもちゃの取り合  
いのような緊張した場面でも、周囲の子どもたちは  
両者の気持ちを自然と感じているようです。保育者  
は一つの取り合いの対応であつたとしても、そこに  
いる子どもたち全体に何かを発信することになるの  
かもしれません。

今回、過去の記録を読み直して考えたことは、以  
前より幅広い年齢の子どもと触れ合うようになった  
今にも通じることと気付き、改めて気持ちが引き締  
まる思いです。子どもたちも私も楽しい! と心か  
ら思える生活を大事にしながら、一人ひとりの要求  
が満たされることを目指し、これからも試行錯誤を  
重ねていきたいと思えます。

(東京都公立保育所)